

六花

9

俳句雑誌りつか
2012 (平成24年)
Cover Dress of Little Bird



香ばしや夢の尻尾の鮎げむり

笹音を立てて夏霧越ゆる尾根

荒鷲に脱皮してゐし雲の峰

残照やねふたの形なりへ雲の峰

崩れつつ光にもどる雲の峰

朝蟬に耳を洗へる寢覚めかな

朝蟬のにぎやかに夢奪ひけり

朝 蟬に夢の離れて行きにけり

絞 りつつ鳴きあげてゆく油 蟬

精 霊 舟 早 瀬 の 闇 を 輝 か す

霊^{たま} の 世 へ 生 ま れ て 十^と月^{つき} 送 舟

盆 舟 の 灯 は 点 け な ほ し き き に け り

笹 舟 を 点 し て 魂 を 送 り け り

天 心 の 櫛^{くしづき} 月 に 虫 す だ く か な

寝てゐても空腹は来る鉦叩

鉦叩一打十萬億土かな

鉦叩闇のますます澄みきたる

虫の音を櫟大樹の遮さえぎれず

目つむれば目蓋まぶたとろけり虫の闇

虫の音の風に曲げられみたりけり

てのひらに水の惑星梨をむく

鵜飼果て城山の闇かぶさり来 高瀬 博子

うかいはてしろやまのやみかぶさりく たかせひろこ

闇迫る川に篝火鵜舟現る

櫂掛けされて鵜舟の鵜が逸る

川へ向く鵜の碑に供花の見当たらず

鵜の吐きし大き獲物に拍手湧く

鵜飼いは全国至る所で催されているが、掲句を岐阜の長良川での鵜飼いとすれば、城山は急峻な場所に築城された岐阜城（金華山）で、よくもこんな場所に城を造ったものだと感心するより、斎藤道三は頭が変だと思った。とこりも言っていた。城は「不安の塊だ」。「悲観主義者が最悪のシナリオを思い描いて生み出した物」と城郭研究者の千田嘉博さんが言っていると神戸新聞の「正平調」に。その陰しく高い城山から闇がかぶさるように降りてくるとは言い得て妙。城山の闇がいい。

錦鯉群れゐる水のもつれけり 藤生不二男

にしきごいむれいるみずのもつれけり ふじおふじお

寝ねかてに山に聴きけり時鳥

目の前をいきなり鳴けり雨蛙

つつぬけの空より鳴けり時鳥

涼風や窓より入りて窓にぬけ

水が纏れていると発見した。民藝運動の指導者であった柳宗悦（むねよし）は「美意識と思索がないと、芸術における発見はない」という趣旨のことを説いた。水のもつれは群れている夏の鯉の動きの激しさと複雑さである。錦鯉は一尾に注目して作る場合多いが、掲句は群れ、しかも水を詠んだ。夏の鯉は特に勢いがあり、鯉の動きに引きずられて水も動く。掲句の言うようにまさに纏れるが如くなのである。錦鯉を持つてきて動く水の方に読者の目を誘導したのは見事。技巧ではなく美意識と思索によつてもたらされた発見。

散るたびに蕾ふくらむ夏椿

江見 巖

ちるたびにつばみふくらむなつつばき えみ いわお

井戸水に産毛逆立つトマトかな

鬼灯や銭湯で躰教りし

滝寺荘ながむ鬪竜灘涼し

墓石の文字読み取れぬ草いきれ

夏椿は別名シヤラノキ（娑羅樹）。仏教の聖樹、フタバガキ科の娑羅双樹に擬せられ、この名がついたといわれる。朝咲いて昼過ぎには落ちる一日花であるところ（正しくは落ちる）ときにはすでに明日咲く蕾が膨らんでいることにも目を向けた。沙羅双樹はインド、クシナガラ城外、娑羅の林の中、釈迦の病床の四方に二本ずつ相對して生えていたという。釈迦入滅の時、鶴のように白く枯れ変じたという。人は死ぬとすぐ別の場所に生まれ変わるともいう。いわゆる輪廻転生。散りながら、次の蕾を膨らませて来ているのである。夏椿にありがちな儂さを強調せず「蕾ふくらむ」としたのが佳い。

雪 卿 集

藤の花

松本文一郎

牡丹の崩るるままに 声明しやうみやうす
藤咲ける幹と幹とは睦み合ひ
昼の雨未だ戻らぬ夕燕
たたまれてウインクよこす鯉幟
風薫る路上に拡ぐ工具箱

獅子の子

貝森光洋

向日葵を驚かしたる金環食
青空を支えて向日葵揺るぎなし
蚊というは骨の塊宙を飛ぶ
哀しくて笑い出したき羽抜鳥
傷つきし後ろ姿の甲虫

せつ じゅ しゅう
雪 樹 集

町中の川

市川伊團次

入梅や川の未だに静かなり
町中の川にボートを遊びけり
残像のいまだ消えざる緋鯉かな
闇を消し闇を作りぬ螢の火
その先を踏んではならぬ螢の火

牛蛙

田尻勝子

緑風や金環日蝕地に溢る
ぞんぞんとすずめ降り来る五月晴
鯉の背に草の穂絮の止りけり
牛蛙鳴いて池中動きけり
すず虫の触角白く生まれくる

蛭雪譚 六甲

七月号選後に

夏の鯉浅瀬を打つて上り切る

永田万年青

「打つ」は「のたうつ」の打つ。その弾みを利用して浅瀬を上りきる。池や淀みに泳ぐ姿は悠然としているが、いざというときには、驚くほどの力を出す。「鯉の滝上り」といい、鯉が滝をのぼること。また、勢いのよいことのたとえにも使われる。この故事は、黄河の上流にある滝、竜門を登ることのできた鯉は竜になるという「後漢書」党錮伝の故事から立身出世することのたとえに使われる（登竜門）。鯉の勢いの本質を見せられた驚きを詠んだ。しかし鯉にとつては必死の場面で上り損なったら死につながる。滝ではないが一身を賭しての瀬上りなのだ。

夏川に逃げたる鯉の素早さよ

錦鯉真鯉の群を分け進む

これらの二句も鯉に神経を集中して成った作品。一つ一つ材料に出会ったら、一句詠んでそれで二丁上がりではない。そこでできた一句は、まだ俳句の入り口なのだ。一つの題材に食らいついて何句も詠む。その姿勢が大切。じつと対峙していたら、見ていながら見えなかった物が見えてくる。そうなるとしめたものだ。もう要りませんというくらい句が向こうから次々にやってくる。音楽が雨のように降ってくるという「伎楽雨曼陀羅華」状態がやってくる。

(以下略)

六花集

老栗一夏万 灯蝉稻照折 短シペ天浜
鶯の望の緑 籠時妻り鶴 夜ヤン窓木
の花の蝶の 巡の雨の返すや 幼タ一の父に綿
声があぢき中 壁をに日に鮮 幼タ一の父に度岬
渡盛さとを流 灯の裂き焼かか 寝かずの店にしよ除海
りりぬとびる 道を道をたつつ原爆 息胸に燕の桃か難
ゆと園てる 追ふと光か行 胸に燕の桃か難
く香風見え川 子か行か行 胸に燕の桃か難
柚こなえ隠二 子か行か行 胸に燕の桃か難
のぼな隠二 子か行か行 胸に燕の桃か難
道すめれつ 子か行か行 胸に燕の桃か難

小
寺
ふ
く
子

加
納

淳
子

平
居

濤
子